房総の山のフィールド・ミュージアム　ニュースレター

# しいむじな

発　行
千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先
〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL:043-265-3111
http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/

2019(平成31)年3月発行

2019・春
64

特集

## ギバチ
## ～川にすむハチ？～

自然観察をするときには様々なことに注意しなければなりませんが、そのひとつとして、危険な生き物が挙げられます。陸上では、スズメバチやマムシ、ヤマビルなどに注意しなければならないことは皆さんもご存知のことかと思います。しかし、川にも注意しなければならない生き物がいることを知っていますか？

今回の特集では、川にすむ危険な生き物（とは言ってもそれほど危険ではありません）、ギバチについて紹介します。

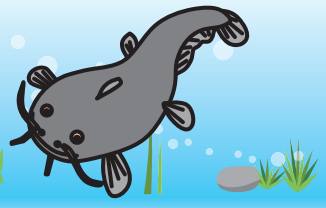
（後藤　亮）

### 房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校の「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

特集

# ギバチ ～川にすむハチ？～



下稲葉さやか作

房総の山のフィールド・ミュージアムでは、毎年夏に小糸川の上流で観察会を行っています。参加者には毎回必ず注意事項をいくつか説明するのですが、そのひとつが危険な生き物についてです。川の中にはスズメバチやマムシのように刺されたり、咬まれたりしたらすぐ病院に行かなければならないような、命にかかわるほどの危険な生き物はいませんが、気をつけなければいけない生き物もいます。そのひとつが今回紹介するギバチです。

ギバチは青森県から、太平洋側では神奈川県、日本海側では富山県までの東日本に分布するナマズの仲間です(**写真❶**)。ナマズといえばひげが特徴ですが、ギバチにも立派なひげが4対8本あります(**写真❷**)。ちなみにナマズのひげは2対4本しかありません。ギバチに近い仲間としては、西日本に広く生息するギギ、中部地方の一部に生息し天然記念物に指定されているネコギギ、九州に生息するアリアケギバチがいます。アリアケギバチは長年ギバチと同じ種として扱われてきましたが、形態的な特徴から1995年に別の種として記載されました。

さて、ではなぜこのギバチが危険な生き物なのでしょうか？その秘密は名前に隠されています。ギバチは漢字で「義蜂」と書きます。川に住んでいるのに蜂(ハチ)の字が使われているのは不思議な感じがしませんか？どうして蜂という漢字が使われているかというと、うっかりギバチを掴んだときに、背びれや胸びれにある棘(専門的には棘状軟条といいます)が刺さり、ハチに刺されたときのように痛むからです。棘には毒があり、刺されるとしばらく痛みが残ります。このように書くと何やら非常に危険な生き物のように聞こえますが、スズメバチのように敵を攻撃しようとして刺すわけではないですし、毒も命にかかわるようなものではありませんので、強く掴まないように注意すれば何も怖くはありません。

小糸川流域ではカワバチと呼ばれ、食用にもされてきた馴染み深いギバチですが、全国的に見ると数が減少し、絶滅危惧種にも指定されています。また、近年東北地方では、元々は西日本にしかいなかったギギが定着しており(専門的には国内外来種といいます)、ギバチの生息地を脅かしています。千葉県ではまだ比較的ギバチが生息するのに適した環境が残っていますし、ギギの侵入もないようですが、油断はできません。

一昔前までは、川で遊ぶ子供たちも多く、川で遊ぶときに気をつけなければいけないことは、年長者から学ぶことができました。しかし、近年ではめっきり川遊びをする子供が減ってしまったために、そのようなことを学ぶ機会もなくなってしまいました。周りにギバチに刺された経験がある人がいれば、ギバチの名前の由来も想像がつくことかと思いますが、このまま川から縁遠くなってしまうと、そのうちギバチがなぜ「ギバチ」という名前なのか、その由来すら忘れさられてしまうかもしれません。

(後藤　亮)

写真❶　ギバチ側面
体長は15～30センチ程度。

写真❷　ひげは4対8本

写真❸　稚魚はオタマジャクシに似ている。

コラム

# 房総丘陵の動植物（12）

## 幻のカエル・タゴガエル

2月下旬から3月上旬の房総丘陵を歩くと、どこからともなく「ググッ、ググッ」と地味な鳴き声が聞こえてきます。その正体はタゴガエル。千葉県にいる両棲類で最も源流に生息しています。

タゴガエルは体長4㎝程で本州、四国、九州の山地に生息しますが、亜種としてヤクシマタゴガエル、オキタゴガエル、ネバタゴガエルなども報告され、遺伝子レベルで研究されている謎の多いカエルです。

千葉県の分布に目をやると、房総丘陵と館山丘陵にその生息が確認されているのですが、両者の間にある嶺岡丘陵では確認されてません。生息するけれど見つからないのか、分布していないのか、未だに謎のままです。

タゴガエルは湧き水が染み出す湧出口の中に産卵するカエルです。オスはその中で鳴くため、姿を目にすることはまずありません。まさに「幻のカエル」です。

そんな湧水口をペンライトでのぞいてみると、たまにタゴガエルに出会え**(写真❶)**、繁殖時期だと卵塊を見つけることができます**(写真❷)**。タゴガエルの卵塊は卵の数が少なく(百個前後)、1つ1つの卵が大きいのが特徴です(卵の直径は約2.8㎜)。田んぼに産卵するヤマアカガエルやニホンアカガエルは卵塊中に千～二千個、卵の直径は約2㎜なので、その差は歴然です。

4月になると湧き水の入口付近でオタマジャクシを目にすることがあります**(写真❸)**。田んぼで見かけるオタマジャクシに比べて白く細長いのが特徴で、産卵場所の状況から、泳ぎ回らなくても、水に浸っているだけで生きていけるようです。しかも、エサを食べなくても卵黄の栄養だけで変態できる変わった習性を持っています。

生き物の活動が賑やかな5月下旬～6月上旬にタゴガエルのオタマジャクシは変態します。その体長はおよそ7㎜。一円玉の半分にも満たない大きさですが、ヒシバッタのようにピョンピョンと元気に跳ね回ります**(写真❹)**。初夏は今年産まれた小さなタゴガエル、昨年産まれた2～3㎝のもの、約4㎝の成体と、3つの大きさのタゴガエルに出会うことができます**(写真❺)**。寿命は3～4年と短いです。

タゴガエルは私たちが口にする水の最初の一滴が出てくる場所に、ひっそりと命を宿します。カエルなどの両棲類は環境の変化に敏感な生き物なので、タゴガエルは私たち人間生活に必要な水を見つめる門番です。幻のカエル・タゴガエル。いなくなる意味の「幻」にならず、いつまで鳴いていて欲しいと願うばかりです。

（大木淳一）

**【参考文献】**
松井・前田(2018)日本産カエル大鑑. 文一総合出版.
大木淳一(2006)幻のカエル～がけに卵をうむタゴガエル～. 新日本出版社.
千葉県(2011)千葉県の保護上重要な野生生物－千葉県レッドデータブック－動物編 2011年改訂版. 千葉県.

写真❶　越冬中のタゴガエル
写真❷　タゴガエルの卵塊
写真❸　タゴガエルのオタマジャクシ
写真❹　変態直後のタゴガエル
写真❺　大きさが異なるタゴガエル

## 観察会報告

### 山のたんけん部２

2月16日(土)に、７名の参加者と養老渓谷駅から梅ヶ瀬渓谷までゆっくりと歩きました。渓谷に向かう途中の里では、早春に咲く草花や冬でも活動するナナホシテントウを見つけました。渓谷では、産卵の始まったヤマアカガエルの卵塊、地下水のしみ出す岩壁の地層のすき間で繁殖するタゴガエルの鳴き声、川底の砂に潜っているスナヤツメ等、この季節ならではの生きものが観察できました。池でタイコウチを見つけた子もいて、驚きました。また、渓谷沿いの地層をじっくりと観察し、遠い昔に海の底に積もった砂や泥のドラマを語る学芸員の話に耳を傾け、房総丘陵の成り立ちを学びました。

(尾崎煙雄)

写真❶ ヤマアカガエルの卵塊　写真❸ タイコウチ
写真❷ スナヤツメ　写真❹ 地層の観察

## 連載　小櫃川流域の生きもの

### ノウサギ ～木更津の請西藩林家と徳川家の縁をつないだ動物～

写真：ニホンノウサギ
(2017年3月17日　木更津市請西)

春の雑木林の山道、「あ！ノウサギ。クヌギの木の根元にいるでしょう」と友人。陽がもれていたが、暗い林内ではどこにいるか分からなかった。しかし、影がわずかに動いたので、気が付いた。赤みを帯びた茶褐色で、長い耳、真ん丸な瞳、ぬいぐるみのようで可愛らしい。そのうち、長い後ろ足でゆったりと跳び、林の中に身を隠した。ちなみに、小学校などで飼育しているカイウサギは、ヨーロッパ地中海沿岸地域のアナウサギを家畜化したもので、ノウサギではない。

さて、江戸時代、徳川家と木更津の請西藩林家の間にノウサギにかかわる興味深い話がある。徳川家康から八代の祖松平親氏(まつだいらちかうじ)が上野新田郡(こうずけにったぐん)から三河(みかわ)松平郷に移る途中、林家の先祖光政(みつまさ)のもとに宿泊した。親氏が光政のもとで越年することになったものの、親氏をもてなす料理がないので、光政は自ら山野に出て兎(うさぎ)１羽(匹)を得た。そして、これを正月元日に吸い物として新年のお祝いをし、以来家臣として従ったという伝承がある。こうして、林家は代々歳旦(さいたん：元日)に兎を献上し、最初に、杯(さかずき)を賜(たまわ)ることが恒例となったという。なお、木更津市上根岸の八坂神社には献兎乃記念碑(けんとのきねんひ)がある。

ところで、ノウサギは小櫃川の土手や林と草地や畑地、水田が入り混じっている所に生息しているが、昼間活動しないので姿をほとんど見ない。だが、稲の２番穂を好んで食べるので、平たい丸い糞(直径約１cm)が、数年前の冬には、谷津田でしばしば見られた。しかし、近頃は、糞もあまり見なくなった。数が減っているのだろうか？と気になっている。

**MEMO**　ニホンノウサギ　ウサギ目ウサギ科
尾を除いた体長約45～54㌢
本州、四国、九州にすむ。日本固有種。カイウサギより耳が短く、四肢は長い。春～夏に普通３子を産む。巣は植物や土を少しかき分けた程度のくぼ地である。

参考文献　木更津市史編集委員会編2012『図説　木更津のあゆみ』 p155-158　木更津市
成田篤彦2011房総の草木虫魚102号　ニホンノウサギ　千葉日報1月30日号(8)
山田文雄1996ニホンノウサギ　所収：日高敏隆監修『日本動物大百科1巻』p62-64　平凡社

(文・写真　千葉県立中央博物館ボランティア　成田篤彦)

## しいむじなの由来

房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

## 編集後記

真冬でも生き物たちは着々と命を繋いでいます。しんと静まった渓谷でタゴガエルの鳴き声を聞いた子供たちはそれを実感したでしょう。房総の山のフィールド・ミュージアムは自然のたくましさや怖さを子供達に伝えていけたら良いと思います。

(岡崎浩子)